

第12回有機化学物質研究会 化学物質による環境中生物への影響評価—遺伝子から生態系まで—

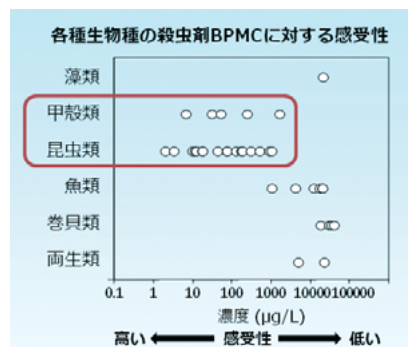
(独)農業環境技術研究所では、農薬など環境中の有機化学物質に関する問題を議論するための研究会を開催しています。今年、11月1日、「化学物質による環境中生物への環境評価—遺伝子から生態系まで—」をテーマに、試験研究機関・大学・企業・関係団体・一般市民など107名の参加を得て開催しました。

私たちの生活にとって化学物質の利用は不可欠なものです。一方で、過度の使用は周辺環境への流出をとめない、環境に生息する様々な生物への影響が指摘されています。このため、化学物質による生物の影響を調べることは、人間活動と生態系の保全を両立させるために重要なテーマとなっています。

研究会では、環境中の化学物質による生物への影響について第一線で取り組んでいる5人の研究者から、遺伝子～個体～群集までの様々なレベル

における生物への影響について研究の状況を紹介していただき、今後の展望および課題について議論を深めました。

(有機化学物質研究領域長 大谷 卓)



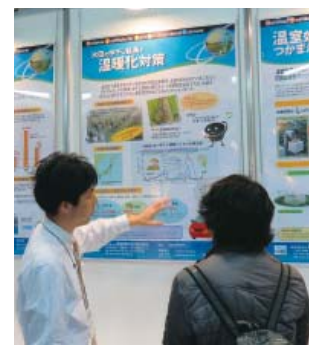
(発表より) データベースを活用した殺虫剤の生態リスク評価の例。殺虫剤BPMCは、節足動物(甲殻類・昆虫)以外の生物に対する毒性が弱いこと、昆虫類は種類によって感受性に大きな差があることがわかる。

アグリビジネス創出フェア2012

11月14日(水)から3日間、東京都江東区の東京ビッグサイトにおいて、「アグリビジネス創出フェア2012」(主催:農林水産省)が開催されました。このフェアは、農林水産・食品分野の最新の技術や研究成果をわかりやすく展示することで、研究機関と事業者の新たな連携を促すことを目的に、毎年秋に開催されています。今回は、全国の大学、民間企業、都道府県の試験研究機関、独立行政法人などから189の出展があり、来場者数は過去最高の33,119人となりました。

農環研はこのフェアの後援機関として出展し、

産業界への技術移転、あるいは農業現場への普及が期待される最近の研究成果をアピールしました。ブースでは、共同研究先の研究者や技術者の協力も得て、実演・説明を行い、300名以上の来場者に関心を持っていただきました。



(連携推進室長 川崎 晃)

受賞報告

第30回日本土壌肥料学会奨励賞
物質循環研究領域
和穎朗太 研究員



土壌中には大気中CO₂の約2倍の炭素が、おもに土壌有機物として存在しています。この土壌有機物の微生物による分解が今後の気象変動により促進され、温暖化を加速させることが懸念されて

います。和穎研究員は、土壌有機物とそれを分解する微生物群集が、気候条件によってどの様に変化するかを調べました。また、土壌有機物が分解を免れるメカニズムの解明に取り組み、微細鉱物と有機物の結合様式をモデル化、主要土壌鉱物の一つである鉄酸化物と結合することで安定化している有機物の量を明らかにしました。

(広報情報室)